

愛について

たけむら 和子

内容理解

この文章で筆者は、アイデンティティについて論じ、突きつけるように問いかけながら、「語る」という行為の実態に迫ろうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

抑圧からの¹ をめぐって、差異、主体の解体、アイデンティティ、自由、平等、正当性といった多彩な概念が議論される。透明で客観的な² の物語への疑義は、誰によって、誰に向かって語られているかが問題である。

・語りは、語り手の意図を超え発せられる。語り手は誰か、語り手はどこから語るかは、確定できない。語りは、聞き手に届いたとき、聞き手にとつての語りとなる。聞き手は、聞くことと同時に出現し、聞く行為が持つ被傷性を受け入れ、自らの聞くことの潜在性を広げる。聞き手を誰と特定することはできない。

・私たちは、名づけられることが³ 性を持つというのに、それが不可避なことに立ちつくしつつ語る。どのような人も、意識しないままでも、誰かに届いていなくても、人は語る。だから、名づけは一回性のものでなく、生成の⁴ である。「〜である」と名乗る、カミングアウトするのではなく、語りによって「〜になる」、(ビ) カミングアウトするのだ。「アイデンティティの政治」や「(ビ) カミングアウトの政治」が、名づけの制度を転覆させるのに効果的な唯一の手段なのか、現存の抑圧的な性体制を転覆するために不可避な戦略なのか、リスクを背負い実践される社会構築的な戦法なのか、そこで何が起きているのか。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

多彩 (三五九・五)

亀裂 (三五九・11)

賛同 (三六一・3)

持続 (三六二・1)

